



きみとどこまでも



森の守護者、ヴィエラ。女は森を育て男は森を護る。成年に達して漸く分かる雌雄は、その生を古くから定めていた。ある一人の仔は願った。大切なあの子とわたしが、何者にもなりませんように。祈りは届かず、彼らを男に育てていく。「わたし」であった「僕」と「きみ」を巡る恋の話。(天頂のゼニス・ブルー) Pixiv掲載のヴィエラ♀×ヴィエラ♂の連作9篇に、彼らが想いを遂げる物語を書き下ろした1冊まるごとヴィエラ♀の本。森は僕らの生を許さなかった。それでも僕はきみと生きていたい。

14RP978-4-20-211114-X

C0193 ¥1400



「僕を少しでも大切に思うなら願って」

ヴィエラの男は独りで生きる。それでも僕は、きみと生きていたい。これはながい、恋のはなし。



このようなヒトにオススメ

- ・エオルゼアの文化や世界設定を考える長編小説が好きだ。
- ・可愛い攻めが格好いい受けに翻弄されるBLが好きだ。
- ・発行時点で未実装の種族をテーマに320P書く狂気を読んでみたい。

1冊まるごと！おっとり白魔道士ヴィエラ♀×ワイルド戦士ヴィエラ♂の本！

咲倉 由狩

・天頂のゼニス・ブルー

——何者にもなりたくなかった「僕」と「きみ」が、森を飛び出すまでの話。

・泣いてくれレイニー・ブルー

——天頂の対称。ずっと男になりたかった「俺」が見た、「お前」の話。

・ましろに虹を引く

——ダルマスカとの出会い。閉じた森から出たふたりが、世界の広さを知る話。

・目を覚ませダーリン

——お酒にまつわるエピソード。お酒は良いもので、悪いもの。 Fanbook

・スルー・ラスソディ(書き下ろし)

——とある令嬢との出会いをきっかけに、ふたりの関係が動き出す。

収録作品




きみとどこまでも



目次

| | |
|---------------|----------|
| 天頂のゼニス・ブルー |003 |
| 泣いてくれレイニー・ブルー |095 |
| ましろに虹を引く |135 |
| 目を覚ませダーリン |155 |
| ブルー・ラプソディ |177 |





天頂の
ゼニス・ブルー

きみは僕の青い空。
どうか、息をさせて。

＊きみはわたしをおいていく＊

きみが振り返る。高く括った髪がふわり、獣の尾のように揺れる。弓の弦が、びいんと震えて鳴っていた。

「見たか!？」

わたしの顔を見た、きみの大きな赤い瞳が光っている。くるくると色が変わるそれを見ているのが好きだった。ずっと見ていたよ、とわたしは頷いた。森に入る後ろ姿も、狐を見付けて嬉しそうに小声でわたしに知らせる姿も、弓を引き絞る横顔も、全部。

きみは隠れていた木陰から飛び出し、たった今射抜いたばかりの狐のところへ駆けていく。まだきみは、十二歳、わたしは十になったばかりの子供で、狩りをするには大人たちの許可がいる。森の守護者であるヴェエラ族に生まれたなら、誰だって従うべき決まりだ。きみは少しでも早く一人前になりたいから、もっと実践を積みたいのに、と唇を尖らせていたけれど、その分一回一回に真剣に打ち込んでいる。

「へへ、いい感じだろ！」

たった一矢で仕留めましたとばかりに、きみは小型の狐の胴を抱えてわたしへ向けて掲げた。ずっと見ているから、知っているの。きみがわたしにバレないように、もがく獣をくびったことを。にこりと笑んで、わたしは頷いた。周囲をちらりと確認して、きみのも

とへと歩き出す。しゃがみこんで毛皮の検分をする隣に屈んで、手元を覗き込めば、きらりと輝く瞳がわたしを見上げた。少し眩しくて、目を伏せる。

「いい狐だね。まだ若いけど、きつともう巢立った子だ」

「おう、毛も随分柔らかくてふさふさしてる！ 防寒にはもってこい、だろ？」

「うん、お母さんに帽子にしてもらったらどうか」

「だな。上着にするには小さいけど……ま、合格点だろ！」

ここはスカティ山脈中腹に広がる、鬱蒼とした森の中。わたしたちは森の中に点在するヴィナ・ヴィエラの集落のひとつ、スピサルの里の子供たちだ。

ヴィエラの暮らし方は、他民族には理解し難いものだという。わたしたちは聖地を護る守り人として生まれ、大抵の場合、古くからのしきりに従って森に暮らし、歳をとっていく。地理的には砂漠や熱帯の国々を森の外側にいくつか数えられるそうだが、互いに不干涉だ。わたしたちは森の外を侵さぬ代わりに、外から来たものの全てに切っ先を向ける。一人一人の寿命がハイデリンに住むほとんどの他民族よりも長いこともあって、その生命の巡る周期は長い。だから、外の暮らしの隆盛に流されることなどなく、国という括りとも切り離された、独自の文化体系が作り上げられていた。

「怪我してない？ 大丈夫？」

わたしはあえてそう聞いた。きみは、慌てて右の手を身体の影に隠した。

「大丈夫だって。俺がそんなヘマするわけねーだろ？」

はあ、とわたしはため息をつく。カッコつけたい気持ちは分かるけど、心配する気持ちも分かって欲しい。毎回同じやり取りをしているのだから、バレルのもそろそろ覚えてくれないかな。きみのことなんか、手にとるように分かるんだから。

手を伸ばし、きみの右の手を掴む。耳が垂れて、後ろを向いた。三本の爪痕が、かすれを引きながら手の甲に刻まれている。

「ほら、この程度唾つけどきや治るから、怪我とも思ってたつーか？」

「傷口から悪いものが入ったら熱病に苦しむことになるって、姉さんたちが口を酸っぱくして言ってるのに」

獣が起こした最後の抵抗の跡に手をかざして、治療術を唱える。エーテルが空気中から手の周囲へと集まり、緑色の光になって傷口へと注がれた。獣の血と、微かに垂れたきみの血の筋だけを残して、美しい皮膚が元通りになっていく。

きみは少し所在なさげに、治ったばかりの手で髪を梳いた。そっぽを向いて、つんと唇を尖らせている。一言目は、こう。

「俺はさ、男になんだから、一人で何でも出来るようになるんだよ。お前はわざわざそんなふうな世話焼かなくてもいいの」

ヴィエラという種族の特殊な生態の一つに、大人になるまで性別がはっきりしない、と

いう点がある。生まれた時から性別は確定しているが、未発達のは、外見からは同種族であろうと雌雄の判定が難しい。十代半ば頃に訪れる二次性徴によって、ようやくどちらか判明する、というわけだ。

男と女。森において、この二つの違いは大きい。森を護ることに違いはないと、大人たちは言う。けれど、女は集落に残るが、男は集落に留まることを許されない。共同生活を送る女に対して、男は一人きりで何もかもを行い、生きる。食料や寝床の調達も、薬の調合も、何もかも一人でやれないといけないのだ。そうやって、わたしたちは幾重にも命を重ねてきている。

この子は、男になりたいと常日頃から言っていた。ヴェエラの男女比率は、大きく女に偏っている。そもその出生数に差があるし、生まれて大人になり、集落の外に出てから命を落とす確率も、共同生活を送る女に比べて格段に高い。

どちらになるかは、神の思し召しだ。既にわたしたちの性別は決まっている。どちらになっても良いように生活の知恵を授け、育てるのがヴェエラ族の常だ。性別がじわじわと心に影響を及ぼして、判別が付くようになってから心の性が寄ることも多い。だから、この子のように「なりたい性」が確立されている子は里の中では珍しかった。なりたくてもなれないこともしょっちゅうなのだ。望んだものと結果が乖離していても、わたしたちは森の掟に従って「男」と「女」として生きるしかない。

わたしたちと同世代の子供はそれほどたくさんいない。元より少人数で集落を営む森の民だし、雄の生殖の時期がそもそも五年に一度ほどと、機会自体がそう多くない。長寿で出産の適齢期が長く、焦る必要がないというのも加わっているだろう。里の周囲で暮らす数人の男が里を訪れるタイミングでないと、子供は増えていかないのだ。

わたしは、きみが男になりたいと語るたびに、胸を小さく針で刺されたような痛みを感じていた。きみの願うことなら叶ってほしいと思う。親が違っても、わたしたちはきょうだいのようなもので、里全体が大きな家族だ。狭い関係性の中できみは、わたしのきょうだいで、友人で、恋人だった。きみの隣は心地いい。ずっとこの時が、続けばいいと思う。黙り込んだわたしの頬を、焦ったようにきみが指先でちよいとつついた。

「おいおい、俺が一人じゃ生きていけないとか言うつもりか？ 言っとくけど、ちよっとくらいなら治癒術も使えるんだからな！ 今唱えなかっただけで。お前が心配しなくても、ちゃんと大人になってお前にまた会いに来るって」

多分、数が元々それほど居ない、わたしたちの世代の中で、男になるのは多くて二人やそこらだろう。

わたしを置いて、きみはひとりで行くつもりなんだ。それが無性に悲しかった。男は一人で生きていく。彼にわたしは必要ない。旅立てば、里に戻ってくるのは生殖のためだけだ。巣立つまではマスターの元にいるし、経験を積めば新たな若い男を連れて森へ帰るの

だろう。でも、そこにわたしはいないのだ。

「会いになんか、こなくてもいい」

わたしは喉を詰まらせてそう言った。じわ、と涙が目には浮かぶ。きみはぎよつとした顔でわたしを見詰めていた。

「ちよ、おい。いつものことだろ、俺が男になりたいのなんて。なあー、腹でも痛いのか？」

顔を覗き込むきみの額を押して、わたしはそっぽを向いた。違うの、きみにはバレたくない。

きみが男になるのがいやだ。きみが女になるのがいやだ。ずっとこのまま、あやふやなまま時が積もっていけばいい。

きみがもし男になれたなら、外へと旅立ってしまう。同じ里のヴィエラであることに変わりはなく、死ななければまた出会える。それは、種をまく男として。きみはたくさんの女たちに歓迎されるだろう。血縁の濃い相手でなければ、求められるだけ種をまいて、また森へと旅立っていく。わたしときみの血縁は濃くはない。きときみはわたしの手を取ってくれると思う。でも、それじゃいや。

きみがもし男になれなかったなら、面倒見のいいきみのことだから、子を持つことに抵抗もなく、誰かを腕の中へと招くだろう。この里の人間なら、子をなすことが恋や愛に結

びついたものじゃないことを知っている。それでも、きみが誰かを受け入れるのがいや。わがままなんだ、わたし。男の役目も、女の役目もいやだった。同じくらしい歳の子は他に数人いる。だけど、きみだけが特別だった。生まれてからずっと、きみのことばかりを見ていた。

多分これは、恋だった。

「お前が何と言おうとな」

きみは、そう切り出して、口をむずむずとさせて、上を見たり、下を見たりした。うつむいて、豊かな髪の毛尻尾をわさわさと血の付いていない手でいじっている。言葉がまとまらない時のきみの手遊びだった。

「あー、なんだ、うん」

わたしは、涙を溜めたまま顔を上げた。真っ直ぐにきみの顔を見ると、赤い瞳が真ん丸く見開かれた。そして、薄く頬に色が灯る。ややあつて、きみは目を伏せて。わたしの手首をぎゅっと掴み、強い視線でわたしを貫いた。

「……お前が嫌がっても、絶対会いに来るからな。ほかの男は無視してろよ。……お前、どんくさいから、俺くらい俊敏な男のがいいだろ、里的にもさ」

「……え」

「だーかーら！ 離れてようが離れてねえって言ってんの！ そんな、寂しそうな顔すん

なよ、ばか」

わたしは、口元を抑えた。鼻の奥がツンとして、駄目だった。多分きみのことだから、男として女の子は確保しとこうとかそんな考えに違いないのだけど、それでもわたしをまるで特別のように扱う言葉に泣けてきてしまったのだ。ぼろぼろと次々に雫が溢れていき、拭っても拭っても頬を濡らしていく。

でも、やっぱりいやなんだよ、ごめんね。

ヴィエラじゃなかったら良かったのに。この森に生まれなければ良かったのに。

離れていても、同じ森にいる。そんな言葉じゃ誤魔化せないくらいに、きみは私にとって必要不可欠なのだ。

ただ、理由もなく、そばにいられたら。それだけできつとわたしは、生きていけるのに。

片恋のノルニル

姉さんから手紙が届いた。遠く離れた街から届いた手紙は、長い時間を経なければ、山の中には届かない。届く時期はばらばらで、平均すると一年に一度、つてところだろうか。だからきつと、近況と呼べるほどの近況ではないのだけれど、それでも旅立った姉の足跡を知る唯一の手がかりだった。

同族の商人が届けてくれた封筒を、ナイフで開けて便箋を取り出す。匂い袋が入っていたようで、知らない土地の花の香りがした。かさ、と五枚綴りの手紙を開くと、見慣れた筆跡の文字が、藍色のインクによってなめらかに並んでいる。

火にかけていたケトルがしゅんしゅんと音を立てている。わたしは厚手のグローブを嵌めて、木製の取手を掴んだ。ポットに熱湯を注ぐと、乾燥させた葉草と、混じった小さな黄色い花が、ふわふわと湯を浴びて開いていく。

姉は、名をカイサと言った。過去のことだ。森を捨てて外に行ってしまったから、もうカイサと言う名のわたしの姉はいない。わたしたちが生まれたときに授かる名は、聖地で暮らす者にのみ許される森の名だ。森の掟に組み込まれ、正しく生きている時にだけ使うことができる。

ヴィエラとして生まれたからには、長く紡がれてきた歴史に名を連ね、慎ましく生きて

いくことが正しいのだろう。それが当たり前だと思っていた。当たり前の暮らし、当たり前の一生。守っている限り、守られる。間違ふことは恐ろしい。わたしも皆と同じように生き、死んでいくのだ。

そんな中で、姉は異質だった。五年ほど前、突然集落を出ていった。理由を聞く間もなく消えてしまった。まだわたしは七つにもなっていない小さな子供で、何が起こったのか理解できず、優しかった姉の姿を探して集落中を探し回った。森は広いが、集落自体は子供の足でもまわりきれれる程に狭い。

行ってしまったのね、と母さんが言った。それきり、何も語らなかつた。

二十ほど離れた姉は、わたしが生まれたときから大人の姿だったから、母にするように甘えた。護符作りや、狩り、木登りが上手で、わたしにも教えてくれていた。この集落にいる多くの女性と変わらない、普通の娘だ。そろそろ子を成す年頃で、次に男が里を訪れたなら、母になつただらう姉。

もう会えないと知って、わたしはべそべそと泣いた。こんな形でお別れをするなんて、思つてもみなかつたのだ。ヴィエラは長命だ。たつた七年の歳月など、薄く積もつた埃のように、気付けば払われ、消えてしまうのだろう。

ほかの誰も、姉のことを話さなかつた。まるで最初からそんな人間、居なかつたかのよう。それが森を出ると言うことなのだ、わたしは肌で感じていた。聖地のヴィエラの

暮らしは閉じている。血が濃くなりすぎないように、集落同士の繋がりがあらくらいで、外界と触れることは殆ど無い。だからこそ、この暮らしは守られていて、続いている。異物など、無いほうがいいのだ。

葉草茶が染み出してきたのを見て、ポットから茶器に注ぐ。嗅ぎなれた爽やかな花の匂いは安心した。茶器を傾けて啜りながら、わたしは改めて便箋を開いた。

恋人が出来たのよ、と姉は綴った。相手は異種族の青年だという。

エレゼン、という種族はすらりと背が高く、肌色の長い耳が顔の横に生えているのだとか。私よりも背が高いけれど、細いものだからきつと、私が彼を横抱きに来れるわね、なんて楽しそうな文字が踊っている。

浮かれた姉の文字は続いた。男に恋をする日が来るなんて思わなかったわ、と言いながら。そして、右上がりの文字は続く。彼と番になると。私は彼の最期を看取るのよ、ともわたしの森に、愛や恋という概念がない訳ではない。母は子を愛するし、子は母を愛する。集落の中で誰かに恋をすることもあるだろう。ただし、男女のそれは、必ずしもありふれたものではない。

次世代の子を残すため。触れ合う理由はそれが一等に大きいのだ。たまたま種を持つのが男であり、たまたま産み落とすはらを貸せるのが女であった。もちろん、一晩のうちに

深い感情を交わす者もいるに違いない。去った森の先を見て、静かにため息をこぼす姿を見たことがある。

男の生は、女のそれと比べて短いことが多い。多数で生活を営む女と違って、一人きりで生きていく決まりで、自分で対処の出来ない事柄に出会ったら命は終わってしまうのだ。だから、男と女の出会いは毎回、まるで一度きりの逢瀬になる。次に会えるかはわからない。生きることへの執着を見出すのは結構だが、失っても引きずる愛の類はそう好まれることはない。

種をまく男も、はらを貸す女も、特定の誰かと結ばれることは殆ど無い。可能性は少しでも多い方がいい。ただでさえ、外界から遮断された森の中では子が増えにくく、病や外傷によって減りやすいのだ。集落という大きな個を保つていくにあたって、当たり前前の決まりごとだった。

番。恋愛において特別な関係を持つ相手。まず、と葉草の茶を啜る。葉草茶には、心を落ち着ける作用がある。ざわざわと胸が風を受ける木々のようにうるさく鳴っていたけれど、わたしは文字を静かに追い続けた。

私は、あの暮らしは私のものではないかと思っていたの。嫌いじゃなかったわ。間違いだとも思わない。事実、そうして長く暮らしてきたんだもの。

でもね、イルヴァア。

「ようやっと、空っぽが満たされたの……」

部屋の中は薄暗くなり始めていた。白い紙に書かれた文字が読みづらくなっていて、わたしは蜜蝋の蝋燭に火を灯した。揺れる炎が、暖かな色で藍色の文字列を照らす。

わたしは手紙を机に並べて、頬杖をついた。

ずっと「カイサ」は空っぽだった。幼いわたしにそんなこと気付ける筈もなかった。今思い返してみても、まだ子供のわたしにはわからない。笑顔が似合うひとだった。真剣な顔で魔物除けのまじないを作るときだとか、笑っていない彼女を見るのはそんなタイミングばかりであったように思う。怒るときですら、困ったように眉を寄せる程度で、仕方ないなと笑う顔が思い出された。あのときもずっと、彼女は空の心を持って余っていたのだろうか。

わたしは。

(からっぽじゃない、大丈夫)

言い聞かせるように、胸の中で呟く。

恋や愛は、男と女にしか生じないものではない。集落の娘同士、深く心で結ばれて、互いの子とともに家族ぐるみで付き合うことだってあるのだ。

たとえそれが男と女に分かたれたとしても、森の中で繋がっていると、みんな言っている。

ちくん。胸を針が刺した。

「イルヴァア？」

「……うん？」

手が止まっていた。わたしは胡座をかくきみの後ろで膝立ちになり、豊かな髪に櫛を通していた。誤魔化すように曖昧に笑う。

「ごめんね、ヘルカ。ちよっと考え事してた」

じいと、毛先だけがゆるくうねる、ほとんど真っ直ぐな髪を見下ろす。きみが自分で結ぶと、いつも頭の高いところで結ぶ簡単な獣の尾の髪型になるのだけど、それじゃあせつかく綺麗な髪が勿体ない、とわたしや集落のお姉さんたちはこぞって弄りたがったのだ。

下ろされた髪は、上質な絹の糸のように細くて、柔らかい。透明から抜き出したような青は、毛先に向かって、青空のてっぺんにある一番美しいところを掬い取ったような色へ

と変わっていく。そんなきみの豊かな髪は、わたしたちのいい遊び道具だった。植物油を通しながら、櫛を入れる。

「本当に、きれいな髪……」

わたしは静かに呟いた。女ばかりの集落だから、髪に気を遣う者もそれなりに多く、互いに髪を編んで遊んだ。けれど、わたし自身はそれほど飾られることが好きではなく、少し長くなれば切ってしまった。今も肩口で、少し伸びた金糸がうねっている。髪の半分を持ち上げて編み込んだりはしてもらっていたが、花を飾るにも苦勞する程度の長さだ。

「今だけだからな」

そう言って気分良さげにきみは鼻を鳴らした。今だけ。言葉を認識して、わたしは視線を落とす。視界に広がる青空も、十分にはわたしの心を持ち上げてはくれなかった。

今だけ。本当にそうなるかは分からないが、きみはもう男になったような心の有り様だった。性の発露は十代の半ばにかけて起こる。十四になったきみはそれこそいつわ分かつてもおかしくないし、二つ年下のわたしだって、そろそろ見え始めてもいい頃合いだ。そうやって時がわたしを追い詰めていく。首をふるりと横に振った。ならばなおさら、わたしはきみと居なければならぬ。

微笑んで、わたしは編むために房を指先で掬った。指先は姉と似て器用な方だ。

「そういえば、きみは男になると言って憚らないのに、どうして髪を伸ばしているの？」

わたしは尋ねた。思えば不思議だった。長い髪は、どちらかというとな性の美しさを誇る要素が強いから。ヘルカの腰よりも長く伸びた髪は、集落のこどもの中では随一の長さだった。

「そりゃ、今だけだからに決まってるだろ？」

こともなげに答えるきみに、わたしは首を傾げながら、細かく指を動かし、脇に用意していた花を一輪、髪へと差し込んだ。

「一生は長いしな。一人になったら、髪だって自分で断つんだぜ。他人に触れてもらえるのなんか今だけじゃん」

きみの髪は、人を誘うためのモノだったの。

ああ、それならば、触れたくてたまらないわたしはさして間違っただけでいいなかつたようだ。だって、わたし以外も惹かれるに決まっているのだから。

房を掬っては、別の房に重ねていく。細やかな編み込みが、長い空の色の髪をより一層鮮やかにしていく。それを見ながら、わたしは手紙を思い出していった。

とある、まじない。この森のものではなく、姉が出会ったエレゼンの青年が育った里のもの。

番となった相手と、とこしえに共にいることを願うアミュレット。その里では、それを互いに持つことで一生の伴侶としての存在を示すのだという。姉は恋人とそれを作ったと、

跳ねる文字で語っていた。ふたりのエーテルを込めたそれは、絆の証であり、ふたりを魔から護る護符であるという。作り方は……。

「ねえ……」

思わず声を掛けてしまつてから、黙る。首を振つた。わたしは何を考えているんだ。わたしときみはそんなんじゃない。このような想いを抱くのはわたしひとりだ。

「……なんでもない」

「なんだよ、気になるじゃん」

きみは楽しみにそう言った。きみにとっては、楽しい話じゃないと思うけどな。

でも、そうだな……。わたしは考え込んだ。ふたりのとこしえに続くえにしを願うものだと知っているのは、わたしだけだ。ある意味都合がいい、と言うべきか。姉はわたしにだけ手紙を寄越した。母の名も宛先に書かず、出立の時にはまだ小さくて思い出も少なかった、わたしにだけ手紙を送るのだ。

「……あのね、姉さんから手紙が届いたんだ」

「カイサ姉から？ 元氣してるって？」

「うん。元氣だつて。えっと……色々書いてあつただけど、魔除けのおまじないを覚えて、作つたつて話があつてね」

「ふーん？ カイサ姉の護符は一級品だったもんな、外でも新しいの覚えてんだ」

「それでね、えっと……」

わたしはヘルカの髪を一房掬った。さらさらと細い髪が、指先から逃げて流れていく。言うんだ。唇が乾いていた。わたしは顔も見えない位置なのに、わざとらしく笑顔を浮かべた。

「ふたりの髪を編み込んで、互いの無事を祈ってまじないを掛けたら出来上がり。それをふたりで身に着けるんだ。厄災が来ても、互いが互いを守ってくれる」

「へえ、髪を使ったまじないか。確かに、髪にもエーテルが通ってるもんな」

きみは微かに振り返った。紅の流し目がわたしを楽しいげに見詰めている。わたしの手元から逃げようとする髪を追いながら、わたしはただ笑顔を保つことに気を遣った。

「やりたいんだろ、俺と」

伝わらぬ筈もなく、わたしはちよつとだけ目を伏せた。

「いいぜ、どうせもうすぐ切ることになる筈なんだ。なら、何かに使えたほうがいいだろ。それにさ」

きみは勝ち気に笑った。長い耳がふわりと揺れる。

「離れててもお前のこと守れるんなら、それってなんかカッコいいじゃん」

ほんと、きみはどうしてそういうことが言えちゃうのかなあ。

わたしはヘルカの頬に触れて、無理に前を向かせた。赤くなる顔を見られるのがいやだ

ったのだ。そういう照れ隠しも全部分かって、小さく肩を揺らしている。

ごめんね、純粹な思いじゃなくて。きみに跡を付けたい、ただそれだけのよこしまな思いが、わたしに言葉を発させた。わたしもきみを守れたらいいのは本当。でも、その裏側はどうどろと煮詰められた膠のように粘着質で、触れたらもう逃せないのだ。

編み込んだ毛の束に、革紐を巻き付けて結ぶ。わたしが触れたがるあまりに、きみの髪はこの集落のどんな女性よりも美しいのだ。そんなきみの、編んでいない一房をわたしは手に取った。

「ちよつとだけ、貰うね。出来上がったら、きみにあげる」

「ん。どーぞ、好きなだけ切ってくれよ」

「だめ。ほかの誰にも気付かれないくらいがいいの」

ナイフの刃を立てる。さく、と微かな抵抗の後に、わたしの手の中に、青空が舞い込んだ。

綾紐の細工をするように、端を結びつけた杭を机に立て、髪を伸ばす。本当に滑らかな

髪だ。切ってもそれはなまめかしく、わたしの心を誘う。

先ほど切った、わたしのそれほど長くない髪をいくらか隣に。指を動かせば、金の糸が青空の色に絡んでいく。どんな編み方をするかまでは書いていなかったから、普段紐を編むときのやり方をする。

右に、左に。互いに絡み合うように見えるのは髪ばかりだ。本当は、私ばかりが追っているのに。小さく笑みが溢れる。大切に思ってはくれているのだろうけれど、かといってきみに行かないでと縋れるほどの強さはない。そういう決まりなんだから、と言われてしまえばそこでおしまいだ。

カイサは空っぽだった。わたしは今、空っぽではない。でも、大人になれば空っぽになるのだろう。

離れたくない。離れても心が通じ合えると信じられるほど賢くはない。わたしにとっての唯一。わたしの青空。居なくなつた時の生活が思い描けない。誰だつて歳を重ねれば大人になって、物わかりが良くなるはずだ。わたしははたして、大人になれるのだろうか。

蝋燭の明かりのもとで、わたしは髪を編み続けた。細い髪も絡まれば、美しいリボンのように仕上がる。ふたり分のそれを、切り離し、端がほつれないように膠を塗った。小さ

な金具を取り付けて、輪っかの形に留めてみる。輪は好き。巡る形だ。

少し飾りが欲しくて、机の中の小箱を漁った。護符や祭具を作るときに出る端材を閉ま
つてある宝箱があるのだ。細かく仕切られた内側を覗き込めば、クズ石がコロコロと転が
っている。その中から二色の石の、とびきり綺麗なところをひとつずつ、拾い上げる。金
具を取り付けてチャームにし、輪の繋ぎ目に並べてみる。

できた。わたしはおんなじ形のふたつを、炎に透かした。

きらきらと編み込まれて模様になった金と青が光る。まるで最初からそうなると決まっ
たように並ぶ色たちに、うっとり目を細めた。仕上げに手の中にふたつを抱え、エーテ
ルを注ぐ。きみを守ってくれますように。ずっと繋がっていると思えますように。

わたしのことを、忘れてしまいませんように。

出来上がったまじないは、皮の小さな袋に入れて、ヘルカに手渡した。中は見ないでと
言う前にきみは開けてしまうから、わたしは耳を垂らした。

太陽の光に透かして、きみは目を輝かせている。

「すっげー、キレイじゃん！」

「あ、ありがとう……」

「この石、お前の目の色だな！」

わたしは顔を真っ赤にした。すぐにバレるとは思わなかったのだ。この近隣で取れる薄灰掛かった青い石はありふれたものだ。特別じゃなくて、たまたまだよと、そう言う機会も逃してしまった。

わたしの胸に提げた小袋の中のまじないには、赤い石が据え付けられ、煌めいている。

「あのね、そんな大層なものじゃないからね？　ただ、きみがひとりで行ってしまうなら、わたしも何かあげられたらって、ただそれだけで」

「いいよ、理由は何だって」

きみは、革袋を紐で括り、腰のベルトに提げた。ぽん、と優しく上から撫でるのを見て、余計に恥ずかしくなってくる。

「離れてても、一緒だからな」

本当は、ふたりで願いを込めるもの。でも、きみの思いは連れていけない。一方通行のアミュレットが、静かに瞳を閉じていた。

微睡みのフォルセティ

一日、一日が、わたしの半身を奪っていく。

いつ終わってしまうのだろう。いつ去ってしまうのだろう。そう考えない日はない。

本当ならとつくのとうに奪われていて然るべきものであった。きみの歳は十五にもなる。平均的な成長をしたヴィエラなら、性別の判定が付くだろう頃合いを過ぎようとしていた。審判を先延ばしにしてくれるきみの身体を見て、早く大人になりたいと不満がるきみをよそに、わたしが感謝をしていたこと、きみには知られたくない。

果たしてきみは、本当に男になれるのだろうか。信じて疑わない姿を見て、思うこともある。どちらになってもわたしは不満を抱くだろうから、きみがなりたいたいものになれるのが、一番に違いない。どうせわたしは嘆くなら、せめて笑うきみの姿が見たいのだ。

ヴィエラは、男になっても女になっても、どちらでもいいように育てられる。その先の生き方が分かたれるのは、昔から決まったしきりだ。きみもわたしも、弓や槍を取るこゝとが出来ると、祭事の為の装飾品を作ることができる。食事の準備やなんかも母たちに小さなうちから仕込まれた。大人になる為の準備はとうに済んでいて。

ただ、わたしの心だけが置いていかれている。

ヘルカはわたしにとっての特別だった。他にも数が多い訳ではないが、似た年頃の子供は数人いて、わたしたちよりも早く「成体」になっている者もいた。その中で、わたしが性に心を乱されるのはヘルカだけだった。少年のような身振りをする友人が、娘になっていく。生まれてから数人を同じように見送っていたから、それは自然の摂理であり、出来上がった形はしっかりと胸に嵌まった。

あの子はただの、ふたつ年上の友達。近づいたきっかけに意味などない。わたしの母とヘルカの母は、とても仲がよく、集落全体がひとつの家族のようにまとまった繋がりの中でも、特に深い仲であったように思う。きつと初めはそのせいだ。

年の離れた姉よりも、もっぱら遊び相手はヘルカだった。あの子はせっかちで、気分屋で、いつもわたしを振り回す。物心ついた時にはもうそれが当たり前になっていたので、苦痛に思ったことなどない。むしろ、おっとりとしていて何事にもひとつ拍子が遅れ、立ちすくむことの多いわたしを新しい場所へと連れて行ってくれることに、感謝をするばかりだった。わたしがする初めてのことには、大抵の場合ヘルカの姿があった。あの子にはきょうだいがいないから、なつくわたしに機嫌を良くさせていたようだ。

刷り込みのように、わたしはあの子のことを想っている。この気持ちは、一体何なのだろう。恋？ 愛？ それともこれは……依存、だろうか。

「母さんが大人になった時？」

大きな鹿を捌きながら、わたしは母に尋ねた。大人になったとき、どんな気分だったかと。

毛皮を剥ぎ取り、大きな鉞を振るって骨ごと肉を断つ。共同の調理場での作業は慣れたものだ。森と共生するわたしたちの暮らしは、命の終わりと共に時が過ぎる。部位ごとに切り出しながら話すのは、それなりによくあることだった。

普段は年の近い友人たちと共に過ごすことが多いが、やはりいざという時に頼りになるのは血の近い家族であると思う。母はわたしをちらりと横目で見て、すつと灰青の瞳を細めた。

「そうねえ」

太い骨を持ち、関節に刃を入れていく。わたしは母が大きく切り出した部位を、使用するための大きさに切り分けはじめた。指先が赤く染まっている。

「男になりたいとか、女になりたいとか、そういうのは思ったことがないから、悩まなかったわね」

わたしはほんの少し、落胆した。きつとこの集落において、大多数が持つ思考だったろう。現にわたしだって、自分自身がどうなりたいたいのか、現実的な姿を思い描いてはいない。わたしがそうであるのに、他人にどう期待したのか。馬鹿らしくなって、小さく鼻を鳴らす。

本当に、みんなの言うとおりなのかもしれない。性別の違いなど些細なこと。生きる形の違いも些細なこと。森全体としての命の営みを俯瞰して見れば、個々の悩みなどちっぽけなものに過ぎないのだ。

「けれど、そうね……」

わたしは向かいに座る母を見上げた。彼女は手の甲で額の汗を拭う。そしてそのまま、ぼんやりと空を見ていた。

灰青の瞳がゆらりと、不思議な色に渦を巻いている。

その姿から目を逸らせずに、わたしは手を止めていた。まだ芯に熱のある獣の肉を前にして、わたしたちの間には鳥の囁きや木々のざわめきだけが通り過ぎる。

不意に目が合って、わたしは肩を揺らした。母はぱちんとひとつ瞬きをして、吐息を漏らす。そしてくすくすと、少女がするように微かに笑った。低めた声に、耳を澄ませる。

「選べなくて良かった、って思ったことはあるわ」
どうして、とわたしは返した。

選べたら良かったのに、とわたしは思っている。あの子が天に選ばれなくて、嘆くことがなければいいと思うし、わたしはいつまでも選ぶことがなく、停滞していられたら良かったと、そう思うのだ。しかしわたしたちは既に定まっただけで、わからないまま審判の時を待っている。

「好きな子がいたの」

母は笑っていた。

「五つだけ年上の子でね。今のあなたみたいに、私はあの子にずっとくっついていて。どこに行くにもいつも一緒。私はそれをただ、一番に仲の良い友人だからだと思っていたのだけれど……ふふ、多分、好きだったんだと思う。あれは、私の恋だった」

「それで、その子は？」

わたしは訊ねる。淋しげに伏せられた瞳が返事だった。

「その子は、男の子だったから、私が大人になる前に、居なくなってしまった。それきりね、もう、会っていないわ」

男の生存率は、女に比べて格段に低い。森で暮らす男は、数年に一度、次世代の子を設けるために里を訪れる。しかし、旅立った全員が帰ってくる訳ではない。戻ってこないなら……同じ森の別の集落に行く者も居るが、生活の中で命を落とした可能性の方が、格段に高いだろう。

わたしがもし同じように彼になつたあの子を見送つたとして……。

「好きだつたんだつて気付いたのは、カイサを妊娠した時だつたわね。あの人に会いたかつたなあ、つて。そんな風に思つたの。そして、もし選べたなら、私も男になりたかつたなんて、そんな風に思つたのよね」

「……どうして？」

結ばれたいなら、男と女であればそれで十分な筈だろう。同性では子が成せないが、異性であればそれだけで次が生まれる。出会つたことの意味が、誰にでも誇れるものになる。自然の摂理に則つて、好きな相手と番えるなら、それがいいに決まつているのに。

「追い掛けたかつたから。ただ傍にいたかつた。いつまで彼がこの森に居たのかは知らないけれど、探しに行きたかつたの」

でもね、と母はいたずらっぽく笑つた。

「その後私は、女で良かつたつて思うのよ」

「……どうして」

わたしの言葉はそればかりだ。わたしがもう一度問うと、灰青の目がキラキラと輝く。「カイサやあなたを産んで、育てることが出来たし。これは男じゃ味わえなかつた。子の姿も見ずにまた森へ帰るんだもの。それに、セシリアとも出会えたしね？」

セシリア。ヘルカの母の名だ。母は懐かしそうに目を細めた。

「あの子には、今度は私が追い回されたものよ。今はそうは見えないかもしれないけどね、あの子、男になるって言って聞かなかったんだから。結局、女の子だったけれど……もしかして、あの子の執念がヘルカに宿っちゃったのかしら」

ヘルカの母セシリアと、わたしの母オスクは仲がいい。年は少し離れているが、姉妹のようによく話し、笑っている。狩りをするときにも連れ立っていくことが多かった。勝ち気で美しく、叱る時には拳の出るヘルカの母と、ヘルカ自身はやっぱり似たところがある。お腹の中に宿った頃にはもう、きつと男になりたかった母の姿はなかったろうに。その辺りも、親子で似るものなのだろうか。

母はそろそろ片付けに入っていた。桶の水を流し、調理台に付いた獣の血を洗っていく。わたしも慌てて、肉の仕上げに入った。

目を伏せる彼女の、歌うような声が響く。

「私の望みはね、選んだ人と傍に居ることよ。私は女同士で良かったって思っているの。あの子とずっと、生きていける。選べなくて良かった。どちらになろうと、きつと後悔は付き纏うものだから。抗えない運命の方が、諦めがついて楽なものよ、イルヴァ」

諦め。負の方向に作用しそうな言葉であったが、わたしには妙にしっくりと収まった。これから勝ち取る未来はなく、既にわたしのはらの中は決まりきって、内臓が育っているのだ。

どう落ち着こうが、わたしは結局泣くのだと思った。あの子が男でも、女でも。わたしが男でも、女でも。どうしたってわたしはどうにもならないことを嘆き、叫び、悲しむのだろう。その責任の所在を天にすべてなすり付ける、諦めという言葉は、わたしにとっての光だった。

汚れた手に視線を落とした。

でも、本当はきつと。

母さん、わたしの、望みはね。

近頃、妙に身体が軋んで仕方がない。寝台に潜り、膝を抱える。高熱に浮かされた訳でもないのに、関節が悲鳴を上げるように痛む。

急激に変わりゆく身体の印、なんだろう。成長期に差し掛かると、急激に身長が伸び、男は筋肉が、女は脂肪があるべき場所に付くようになっていく。あの子のことばかりを気にしていたが、わたしももうそういう時期に差し掛かっていたのだ。自分の人生だもの、大きく左右するのは自分の性に違いない筈なのに、わたしの心のしるべはいつだってきみ

だった。

痛い。寝台の中で目を瞑る。ただ苦しいばかりのこの痛みも、あの子にとっては喜びの具現化であるに違いない。その結果がどうであれ、変化の時は待ち焦がれて久しいのだ。

男と女の違い。一番は生殖器だろう。子供の頃の外見としては、股を覗いたとて男女ともに生殖穴があるだけだ。

ただし二次性徴に際して、男は生殖穴に備わった肉の芽が育って幹となり、睾丸が膨らみやがては穴が消えていく。女ははらの中の器官が産道と繋がり、一定の周期で血を流すようになる。役目に適した形に作り変わるのだ。それが済めば成体、大人と言える。

怖かった。一日なんて単位でなく。一秒ずつ、わたしが削り取られていく。

手を伸ばした。下履きの上から、そこに触る。

確かに、触れた感触があった。

通い慣れた家の扉の前で、わたしは立ち尽くしていた。今までと変わらない外装の前で、

わたしの胸の内側は絵の具をぐちゃぐちゃに混ぜたように乱れている。起きてからこっち、一度もうまく笑えていないわたしに母さんは何も言わず、ただわたしの背をそっと押した。チュニツクの裾を両手でぎゅつと握る。ああ、どうやって切り出そうか。俯いて、サンダルをつま先ばかりに視線を落としていた。いつまでもここに居たって、突きつけられた現実は変わりようがないというのに。

「イルヴァちゃん？」

背後から声が掛かって、わたしは肩を跳ねさせた。そこにはセシリアさんとヘルカの姿があった。どうやら朝っぱらからどこかに出でいたらしい。

「ん？ イルヴァじゃねーか！ こっちから行くとこだったんだよ！」

まず目に入ったのはいつになく上機嫌なその顔だった。駆け寄ると、わたしの手を握って、ぶんぶんと子供のように振るきみ。おかしい、とわたしは身を強張らせた。勘が働いて、きみの顔を見上げる。輝くような笑顔だ。きつと。

審判が働いたのは、わたしだけではなく。

「いいや、部屋入れよ。何か用なんだろう？」

急ぐヘルカに、ぐいぐいと強く手を引かれるまま、部屋へと入る。きみは、笑顔で振り向いた。にこにこ、ずっと満面の笑みだ。それを見たわたしの心に塗られた絵の具は、どれを色名として採用したらいいのか分かったものではなかった。嬉しい、悲しい、

感情の名前が見付からない。ただ、掻きむしられるように苦しいと思う。

「きみが言いたいことは、わかっているつもりだ」

わたしは静かにそう告げた。どく、どく、と血が巡る音がする。きみは顔を真っ直ぐに上げて、強い眼差しでわたしを見つめた。胸を指で、とんと指しながら、彼は口を開く。

「俺は、男だった」

おめでとう、って言うべきなんだろう。ずっと彼はそう望んでいたのだから。言っただけようとするのに、胸が詰まってしまう言葉に出来ない。

きみがわたしの髪をそっとかきあげた。わたしは視線を上げて、少し高い位置にある真っ赤な双玉を見つめる。言葉を待っていた。はやく、と急かすような視線に、わたしはくしゃくしゃの笑顔で応えた。

「僕も。男だったよ」

目が見開かれる。

「……………え」

ヘルカは口をぱくぱくとさせた。餌を求める湖の魚みたいな顔をしていた。

「……………何か俺、耳が遠くなったかもしれないねえ」

そう言って耳をかしかしと掻いたヘルカは腕を組み、顎を引いて、引きつった笑みを浮かべて僕を見詰めた。残念ながら、僕はそういう冗談はあんまり言わないタイプなのだっ

た。

ヘルカは僕を女の子になるものと信じて疑っていない節があるのは最初から知っていた。でも、こうも拒否反応を示されると僕自身もムキになる。何にだって、なりたくてなった訳じゃないのだ。

「ヘルカ」

「うん」

「僕、男」

「聞こえねえ!」

「聞こえてるじゃん!」

僕はヘルカを睨み付けた。

僕にとってヘルカがどんな姿でも半身のように思っているが、彼にとってはそうでなかったのだと、まざまざと突き付けられたようだった。ヘルカは女のわたしと森を護りたかただけで、イルヴァという人間自体を深く好いている訳ではない。悔しくてたまらない。男になったことにそこまでの抵抗はなかった。悩んだのは彼がどのように受け取るか、ただそれだけだったのだ。しかしそれは、見ての通りの結末になった。男でも女でも、心が傍にあればよい。女の語る愛は幻想だった。

「普通お前は女だろ!? そういう態度だったし!」

ヘルカは両手の拳を握って熱弁した。僕は両腕を胸の前で組み、ふんとそっぽを向く。

「態度なんか性別に関係ないってきみも知ってるだろ！」

ヘルカは僕の両肩を握って身体を揺らした。

「お前が男とか信じられねえ！」

「きみが信じようが信じまいが、僕はこのまま男として育つんだからな」

「お前こんなにかわいいのに？　ちよつと見せてみる」

「ヘルカ！　どこに手を掛けてるんだよ！」

「ちんちん見りゃ納得する！」

「ちよつ、まっ！　き、きみはバカなのかッ！」

しゃがみこんで僕の履いていた長履きに両手を掛け、引きずり下ろそうとするヘルカの手を掴み、歪な取っ組み合いになった。同性同士だけどそれは恥ずかしいから嫌！　デリカシーってものがないのかこの子には！

がん、と膠着状態に現れたのは神の裁き。否、ヘルカの母さんのお盆だった。

「そんな風に育てた覚えはない！」

頭を抑えて悶絶するヘルカの前に、僕は顔を真っ赤にして、ふうふうと息を荒らげている。セシリアさんは僕の頭をそつと撫で、眉尻を下げた。

「……聞こえちゃってたんだけど。……そうだったんだね、イルヴァちゃん」

「……うん」

僕は、男だった。生殖穴を広げれば、肉の幹が頭をもたげ、睾丸になる部分は膨らんで芯を持ち始めていた。紛れもない性の発露であり、逃れようのない事実だった。

聞けばヘルカも気づいたのは今朝の話で、長老に報告に行った帰りだったのだと言う。こんな時もお揃いにならなくてもいいのにな、なんて乾いた笑いで思う。僕の性別については、先程起こった喧嘩の叫び声で、耳のいい同族たちには察しのつく所ではあるだろうが、一応しきたりはしきたり。母と共に、長老の元へ顔を出すことになる。

どうなっても、きつとわたしは後悔をした。けれどこれは、わたしにとって最悪の運命だったのではないだろうか。

きみが女で、わたしも女なら、母たちのように集落の中で暮らしたろう。他の男の子を孕むことに、きつと涙を溢しながら。

きみが男で、わたしが女なら、きつと彼の望んだ通りに。子を設けることになって。…
…体は離れて、心は虚になる。

きみが女で、僕が男なら。きみに会うために死にものぐるいで生き抜いただろう。やはり心は虚になるが…きみを手に入れたような心地は、決して悪くなかったかもしれない。

きみは男で、僕も男。結ばれることはないどころか、きみは僕のことを、生殖におけるライバルとして見ることになる。

願っておけば、少しは叶ったのだろうか。どうか、せめて心は隣にありますようにと。……いいや、祈りに結果は伴わない。たとえどう願おうが、既に決まった事柄だった。なりたかったのになれなかつたと恨み節が増すばかり。諦めてよかつたのだ。この痛みは、きつと最小限のものに違いない。

ああ、良かった。何も最良がなくなつて。


この集落に男がいる。それは極短期間の特殊事情にあたる。僕らはすぐに家族と引き離され、厳しい孤独な生活へと身を投げることになる。共に暮らす大きな家族であるのは、これが最後だ。

短い猶予の中で、僕達は言葉を交わさなかつた。いつだって出立できるように、思い残すことのないよう、わたしの痕跡を少しづつ拭っていく。

同じ森を護る仲間だとして、顔を合わせることはほとんどなくなるが。今更剥がれ落ちた小さな欠片など、空虚な穴を広げるものではない。

だから、大丈夫。

夜を待った。月夜に、雲がかかる。



ブルー・ラプソディ

知らない、きみのこと。
ふたりだから、心を交わす。

「……よし」

地属性のエーテル操作により隆起した石塊が、ファイアスプライトの核を貫いた。砕けた赤いクリスタルが砂に散らばり、光を失って空気にほろほろと溶けていった。今のが最後の一体だ。

「ゼニス、怪我はない？」

「とーぜん」

振り返ると、ゼニスは大きな戦斧を振るって肩に担ぎ直したところだった。彼が立つ丘には、火属性に耐性のある甲殻を纏ったりザードが数体、月明かりの下で伏していた。息の根を止めたことを確認し、さらさらとした砂地を駆け下りてくるゼニスの動きに隠したところはない。頭の天辺からつま先まで確認する僕の視線に、きみは片眉を上げて笑った。

「お前、この程度の魔物に俺がやられるとでも思ってる？」

「そんな筈ないよ。手強かったのはこいつだけだもの」

こつん、とふたりの間に横たわっていた一際大きなザードの尾を杖の石突でつつく。ひとりずつで対峙したら少し危ういが、視線を引き付ける彼の斧術と、僕の治癒と攻撃の魔術が合わされば負けることはない。そんな奴に従っていた子分たちや、術に感応して湧き出たスプライトたちも数が多いだけで、散らすのにさして苦労はしなかった。

とはいえ、心配なものは心配なのだ。染み付いた癖のようなものだから許してほしい。

近くにやって来たきみをまだ見ている僕に呆れた顔をしながら、ゼニス は戦斧を垂直に振るい、リザードのボスの尻尾を断ち切った。肉は硬くて好んで食うようなものではないが、依頼主への報告のためだ。取り出したロープで手際よく括り、逆さまにして肩に担ぐ。じわじわと滲み出した血が滴り落ち、砂漠に跡を付けた。

「こんなもんか」

「うん、呆気なかったね」

僕らが集落を飛び出して三年ほど経った。行く先々で魔物の討伐や商人の護衛任務をこなしては路銀を稼ぎ、僕らは当初の目的地であるラバナスタへと最近辿り着いていた。もうだいたい外の仕組みにも慣れていて、路銀や情報の稼ぎ方に困ることもそう多くはない。

ラバナスタはさすが王の都とでも言うべきか、人が驚くほど多い。商店の通りなど、人の多い時間帯にはまっすぐ前に向かうことすら難しいくらいの賑わいぶりだ。人が多いということは、物流が豊かであることの証明であり、同時に物盗りなどのトラブルが多いことも示している。依頼は選び放題なくらいに集まってくるし、金払いも良い。その分宿屋や食費、消耗品にかかる代金も高くなるのだが、致し方ないだろう。

今日の依頼は交易ルートに最近現れるようになったリザードの群れの掃討。夜の砂漠はひどく冷え込むが、北の山の冬ほどは寒くない。慣れた僕らにとってやや動きの鈍るリザードたちは問題なく片が付き、あとは帰るだけだ。

やっぱりふたりで掛かる仕事は効率がいい。それに、雇用主の方も僕らが組んで戦うことで互いをカバー出来ると分かってくれる人が増えているから、セットで声が掛かることも多くなってきた。機嫌もよく、最近新調したケーンを背負い、歩き出したきみの後を追おうとした時だった。

ぴくり、と耳が動き、咄嗟に振り返る。視界には夜の星と一面の白い砂だけがコントラストを作っていた。しかし、その先に。僕はゼニス小さく呼んだ。きみは背負ったばかりの斧の柄に手を掛けて、大きな歩幅で僕の隣に並ぶ。

「聞こえた？」

「おう」

(たすけて)

女の人の悲鳴だった。随分と遠いが、音のない砂漠は、森の中で獣の足音を聞くよりも遙かに容易く音を拾う。特に人の声など、自然の中で異物となるものは尚更だ。

僕の購入したケーンは、魔力を高める石が鋭く据えられていて、魔術の媒体としてだけではなく、棒術や槍術の獲物としても使えるものである。それを構えて、体勢を低く砂地を蹴る。せっかちなきみは既に背中を見させているが、引き離されることはない。砂に一歩ずつが離れた足跡を二つ並べて、丘の向こうを目指す。

少し走ると、その影が見えてきた。何もない広い砂漠の中、ほろの被さったチョコボキ

キャリッジが横転している。周囲には巨大なアントリオオンが数体、キャリッジを取り囲んでギチギチと顎を揺らしており、シーク族と思しき丸い人影が、赤い血を砂漠に染み込ませていた。

「いくぞ！」

「うん！」

キャリッジを引くチョコボの足音で、砂地に眠るアントリオオンを轆き起こしてしまったと言うことだろうか。倒れている男を含め、キャリッジの乗組員らしき人間は全員シーク族の男で、人影は三つ。女性の姿は見られない。大振りなナイフを取り出して対峙している男と、キャリッジの陰で銃を構えた男がいるが、二人とも酸液を浴びたようで、半身からじゅわじゅわと煙を立たせていた。武装しているとはいえ、液に触れた肌は焼け爛れているだろう。

ゼニスが丘を滑って下り、そのままの勢いで斧を振り上げる。ナイフの男と退治していた一番大きな個体が、刃が捉える直前に気付いたように顔を向けたが、もう間に合わない。ガチン！ と大きな音を立てて、頭と胴の間に斧が食い込む。大型昆虫とはいえ、弱点の継ぎ目にまともに喰らえばただでは居られない。頭が切断されて宙に舞い、吹き出た体液が周囲に飛び散った。

キシヤアアア、と他の二体が叫ぶように鳴いた。一体が跳躍して大顎を開く。僕は杖を

振るい、その横っ面に石塊を叩き込んだ。鋭い石の先端が、物理攻撃に耐性を持つ硬い殻へと突き刺さる。吹き飛ばされたアントリオンは、仰向けにひっくり返り脚をバタバタと動かしていたが、やがてピタリと静止した。

「あと一体！」

その時、どたん、とキャリッジの中で音がした。全面がほろで覆われた中身は、恐らく叫び声の主に違いない。大丈夫だよ、と伝わるはずも無いが杖を握り直す。

最後の一体は、傷のないゼニスよりも弱ったシーク族を狙うことにしたらしい。素早い動きで砂の上を走ると、砂をキャリッジに向かって吹き付けた。慌てたようにバン！バン！とキャリッジの影から銃声上がるが、視界の悪い中での乱射は当たらず、巨体が砂の中で閃く。

砂煙が落ち着くのを待たずして、ゼニスが斧を持ち突進したが、間に合わない。焼けていない方の手はアントリオンの顎に捉えられ、鮮血が噴き出した。ごとりと銃が砂地に落ち、シーク族の丸い巨体は持ち上げられてぶらりと吊り下がる。

「ぐあっ！ この、虫ケラ！ 俺の邪魔をするんじゃねえ！」

ばたばたと自由な手足を動かすが、顎が食い込み、血が滴るばかりだ。そんなアントリオンの無防備な背後から、ゼニスが斧を振り抜いた。またも弱点に叩き込まれた一撃は、胴と頭を切り離す。頭とシーク族が、砂に叩き付けられてべしゃりと音を立てた。

僕も丘を駆け下りていき、戦闘の終わったキャリッジの脇へと近付く。切り離されてもなお離す気のない大顎はみちみちと腕に食い付いている。倒れていたもう一人も、どうやら腹は上下していて、弱いながらも息があるようだ。よかった、と回復術式を唱えようとした時だった。

「ありがと、さん！」

急に殺気を感じて振り返る。ナイフを持ったシーク族が、巨体に似合わぬ俊敏さで突っ込んできたのだ。僕は咄嗟に詠唱を中断し、ケーンの柄でナイフを弾く。どうして？ 考えるよりも先に身体が動く。残った右腕で器用に斬りつけてくる太刀筋をいなし、短い首筋へと重い杖の先端を打ち付けた。

「ぐえっ！」

何も聞かずに殺すわけにはいかない。とはいえ、殺す気で来たのならそれなりに対応しなければならぬのだ。急所に本気で打ち込めばダメージは小さくないようで、呻いたシーク族はよろめき、砂に倒れ込んだ。混乱したチョコボの鳴く声だけが砂漠に響いていた。

「大丈夫か？」

「平気。……この分だと」

先程の女性の声が気に掛かり、横転したキャリッジのほろを持ち上げる。真っ暗な内側に、月の光と僕の影が伸びていく。

裸足の足が最初に見えた。

後ろ手に縛られた女性が横たわっていて、キャリッジの荷台の隅で僕らを怯えた顔で見上げた。腰ほどまで伸びた桃色のさらさらとした髪がレースのように、上品な仕立てのブラウスへと優しく被さっている。やっぱり。耳の先を俯かせた同族の姿に、思わず唇を噛み締める。

武装したシーク族たちは、彼女を守る護衛ではない。誘拐犯だったのだ。外れて首に掛かった口枷を見るに、アントリオンに襲われて横転した際に自由になった口で叫んだが、男たちに脅されて声を殺すことになっていたのだろう。痛ましい姿に眉を寄せ、杖を置いて近づく。

「……大丈夫？」

「……………あ」

倒れたまま動けない女性の背後に手を伸ばし、荒縄を解く。彼女の腕には宝石のあしらわれたプレスレットがいくつも巻き付いていたが、それに似合わぬ縄目が擦れ、手首に薄く血を滲ませていた。足首にも、幾重にも巻かれた縄があり、急いで解く。

開放された彼女は、弱々しく手を付いて項垂れている。僕は小さく呪文を唱え、治癒魔法を掛ける。穏やかな緑色の光が彼女の傷口に溶け、粗い跡を滑らかに消していく。

「……………あなたは」

彼女が顔を上げる。僕は優しく微笑んだ。

「僕はレイニー。外に居るのが相棒のゼニス。……きみは？」

「私は、アシユリー・アップルヤードです。お父様に頼まれて、私を？」

「いんや、通りすがりの傭兵。お嬢さんは大丈夫そうか？」

ゼニスがほろの入り口を大きく開けて覗き込んだ。その向こうではシーク族たちが後ろ手に縛られてひとまとめにされているのが見える。武力行使は彼の得意分野だが、任せきりにしてしまったのは少し申し訳なく思った。

「あの……あなたたち、男のヴィエラ……ですよ、ね？」

「ん？ 見たことねえ？」

「街生まれの子かな。お父様って言ってたけど……」

「えっと、私は養子で、父はヒューランなんです。物心付いた頃には街で暮らしていたので、ヴィエラは女性しか見たことがありませんでした」

なるほど、母親が妊娠したまま、もしくは赤子を連れのまま森を出たのだろうか。アシユリーさんは仕草のひとつひとつがたおやかで女性らしく、育ちの良さを窺わせた。

「お父様ってのが、金持ちだったりする？ こいつら、盗賊の類だろ」

「ええ……実を言うと父は、材木商で財を成した商人でして……。身代金、などという言葉が聞こえましたから、きっと私とお金を交換しろ、などと脅すつもりだったのでしょう」

「大変だったね。……立てる？」

手を差し伸べると、彼女は少し迷ったあと、手を取った。よろ、と少し萎えた足取りで立ち上がる。

「家はラバナスタかい？」

「ええ、そうです」

「街まで送るよ」

「キャリッジも動きそうだしな。ちよつとダメージ来てるみてえだけど……こいつら押し込めて、お嬢さんと俺達で綱を取って。街ぐらいまでなら保つだろ」

僕はアシユリーさんをキャリッジの外へと連れ出した。裸足が柔らかい砂に少し沈んで跡を残す。僕は彼女を静止して、腰に下げていた鞆から麻布を取り出した。鋭利な硝子などは散らばっていないが、街中はとても歩けそうにない。

「よかつたら、靴の代わりに。砂漠はまだいいけれど、固いところを歩くにはちよつと危なそうだから」

「あ、ありがとうございます」

彼女が腰掛け、足に布を巻いている間に、二人で斧と杖を梃子のように使ってキャリッジを起こす。砂漠ゆえに足元は悪いが、砂漠だからこそ横転しても最小限の衝撃で済んだらしい。ぱらぱらと砂と一緒に木の破片が落ちたが、太い木の車輪もきちんと回りそうだ。

立て直した荷台に、下手人のシーク族たちを担ぎ込む。どうやら命に関わる傷はないようで、最低限の治療はゼニスが既に施してくれたら良かった。

「んじゃ、俺はこいつら見張つとくから。お前はお嬢さんと一緒に御者台でチョコボの誘導頼むわ」

ゼニスが斧を持ち、荷台に乗り込む。僕は頷いて、戸惑うチョコボに近付いた。キャリッジを引くチョコボは得てして賢いものである。ルガディン族も乗せて走る大型種のチョコボは、最初は混乱して騒いでいたが今は大人しく、僕が顔を撫でると愛嬌のある瞳でゆっくりと瞬きをした。

横に大きな体格をしたシーク族も座れる御者台は、ヴィエラが二人並んで座っても平気なだけの広さがある。僕は先に乗り込み、布を足に巻き終えたアシュリーさんに手を差し出した。彼女は僕の手を取り、御者台によじ登ると、僕の隣にちよこんと腰掛ける。

手綱を引けば、チョコボは勢いよく走り出した。幅の広い車輪がごろごろと音を立て、広い砂漠を街に向けて一直線に横切っていく。

「あなたは、森から来られたのですか？」

アシュリーさんが僕に訊ねる。僕はひとつ頷いた。

「北東の山脈の中腹から。ゼニスもそうだよ」

「では、私の母と同じですね」

「きみもヴィナだものね」

「あの……どうして森を出られたのか、お訊ねしてもよろしいでしょうか」

どうして。僕は少し悩んだ。どう、言うべきなんだろう。

僕はゼニスと一緒に居たかった。だからきみを殺そうとした森の仕組みを憎んで、手を引いて飛び出した。僕の外に向く意志は、全てゼニスへの恋心に起因している。赤の他人に突然話すような話題ではないだろう。

考え込んだ僕に、アシュリーさんは慌てて胸の前で手を振った。

「言いにくいことならいいんです！ 死んだ私の母も、あまり森のことは話したがりませんでした。閉じた暮らしが嫌だった、とだけ聞いたことはありますが……私はそれを見たことがなくて、どんなものなのか聞いてみたかっただけなのです」

「言いにくいこと、つて言えばそうなんだけど……。心底嫌で出てきた訳じゃないよ」

「特に男性は、森の中で孤高の存在として暮らすとか……？」

チョコボが地を駆ける足音と、ごろごろと音を立てて車軸が回り、時折跳ねては衝撃を受けて軋む鳴き声を携えて砂漠を行く。空は薄く桃色を引き連れてきていて、もうすぐ太陽が姿を覗かせるだろう。

「普通は、一人きりで、ただひたすらに森を守って生きる。僕らもそれに倣ってマスターに付いたものだよ。……森の暮らしは大変だったけど、好きだったな。でも、森は僕らを

生かしてはくれなかったから、逃げてきちゃった」

くす、と小さく笑う。そう、逃げ出してきた。そんな僕を見て、不思議そうにアシユリさんが首を傾げる。たった三年前のことだ。しかしまるで違う世界にやって来たように、僕らの人生は転換した。

「僕は森の外を見られて良かったと思っているけど……きみは、森に憧れる？」

「私は……そうですね……」

胸に手を当てて、今度はアシユリさんが静かに考え込む。チョコボの疾走に合わせて地面がどんどん後ろへと飛んでいく。風を受けて、ゆったりとした彼女のボトム裾が膨らみ、ぱたぱたと小さく音を立てていた。

少し恥ずかしそうに、彼女は俯いた。

「実を言うと、許可を貰えず、街の外にはおろか、屋敷の外にもあまり出たことがないのです。私の知らない場所の話は、何でも気になってしまいます。だから、その……差し支えなければ、森のお話を聞かせて頂けませんか」

広い外の中でも、自分の街しか知らない人は案外多いと気付いたのは、外に出たからこそだった。自分の村の産業に従事していて、外との繋がりは他の商人が橋渡ししてくれる。そんな彼らにとって、酒場で聞く他の地域の話は豊かな娯楽であるらしい。住む場所が違えど、実際に踏み出すことのない外への憧れは誰しも持ち得るものということだ。

大きな都の頭が砂漠の向こうにちらつく。真っ直ぐにキャリッジを走らせながら、僕は村のことを語った。狩猟、採集や家事のこと。家族のことや、信仰、お祭りのこと。少し前のことなのに、もはや遙か彼方の懐かしい思い出に変わっていた。

いつもきみが隣に居たから、何もかもが美しくなっていたのかも知れないけれど、でもきつと、それだけじゃない。閉じた暮らしではあったが、あの世界はそれで完成していたのだ。あそこで生まれ、死んでいくことは別に不幸じゃない。

人生はそれぞれのもので、生きたい場所で生きられればそれでいい。あの場所が生きたい場所だと感じる命の幸福と、僕の幸福は比べようがない。苦しませるのはただひとつ。選ぶ余地がない時だけだ。

「木々が豊かな土地……美しいのでしょね。私は父が扱う、伐採された木材しか知りません。葉は枯れ落ちていきますし、美しい花も根を無くせば萎れていくばかりです」

「うん、綺麗だった。夜が明けてすぐに外へ出ると、朝露に濡れて緑が一層色を濃くしているんだ。木々の間からは光が差し込んで、木漏れ日はカーテンみたいに静かに揺れている」

「素敵……」

うっとりとしてアシュリーさんは目を細めた。大きな緑色の瞳は丁度、冬を越えて枝先に萌えたばかりの新芽の色をしている。

「森は、外の生き物を受け付けけない。うかつに立ち入れれば、恐らく同族だろうと守り人たる男が死角から射掛けてくる。だから、たとえ美しい故郷でも、僕にとつては遠い土地なんだけどね」

「あなたほど強い方でも生きられないという土地ですもの。武術のひとつにも触れたことのない私には、到底行くことは叶わなそうです」

ふふ、と寂しそうに彼女が微笑む。生まれたときから、自分を知る前に生きる術を身に着けさせられる生活だったから、確かに守られて育った女性には、木々を避けて歩くことすら一苦労かもしれない、と思った。

「きみは、どこかに行きたいと思ったことはある？」

「どこか、ですか」

「うん。ここではない、どこかに」

「そうですね……。武力で連れ出されておいて言う言葉ではありませんが、外、には少し憧れがありました。でも、行きたい……。か……。今まで、そんなこと」

「考えたこともなかった？」

「わかるんですか!? そう、なんです。お父様が、お前は身体が弱いから、と屋敷に留めますから。詩人の語る外の唄だけで、十分でした」

でも。アシュリーさんは、僕を見てはにかんだ。

「ラバナスタって、こんなに大きい都だったんですね」

「アシユリー！」

「お父様！」

門を潜るなり、出迎えたのは武装した傭兵の一団だった。今まさに出立しようとする騎乗用のチョコボの群れを引いていた男たちの前に、僕が操るキャリッジが現れる。男たちに何やら捲し立てていたヒューラン族の商人らしき老人は、僕の隣に目をやるなり、勢いよく走り出した。

僕は手綱を引いてキャリッジを停車させると、先に降りてアシユリーさんの手を支えた。少し危うげに降りた彼女に、真っ直ぐに突っ込んできた男性が抱き着く。

「すまない、怖い思いをさせてしまった！ まさかお前を狙う賊を警備が通してしまうなんて、あってはならないことだ！ 怪我はないか？」

「ええ、大丈夫です。こちらの方々が助けて下さいました」

ぺたぺたと心配そうに肩と腕に振れる男性は、僕らに気が付くと、僕の両手を握りしめ、

ぶんぶんと振りながら大きく頭を下げた。

「ありがとう、本当にありがとう！今の儂には娘だけが宝物だ。どんなに礼を言ったら良いものか……！」

「なんだ、お前らが救出していたのか」

チョコボを引いていた男のうちの一人が近付き、被っていたサレットのバイザーを上げた。見れば遅い身体付きをしたルガディンだ。最近出入りしている宿屋で顔を合わせたことがある。荷台から降りて、目を覚ましたシーク族たちを駆けつけた兵に引き渡していたゼニスが、ひよこりと顔を覗かせた。

「おっちゃんが来るつもりだったのか？わりーな、仕事取っちゃまった」

「まさか新顔にしてやられるとはな。しかし、よく砂漠ですぐに追えたな。お前たち、騎乗獣も連れていなかっただろう」

「別に追った訳じゃねーよ。別の仕事してたら、このお嬢さんの悲鳴が聞こえてな。行ったらこいつら、アントリオンに襲われて壊滅しかかってたんだよ。このお嬢さんの幸運の星だろうさ」

そう言っただけで憚らないゼニスに、ルガディン族の男性は背を屈めてこそりと囁いた。

「幸運なのはお前たちもだな。アルフレド・アップルヤードと言えば市場で知らぬ者のない大商人だぞ。義娘への溺愛ぶりも有名だ。俺たちの財布に入らなかった金がお前たち

二人に注がれるとは……全く、色男は女神さまも惚れさせてんだな」

そんな会話を知ってか知らずか、アルフレドさんと言うらしいアシユリーさんのお父さんは、早速従者を呼び付けていた。

「謝礼の用意だ！ 額は……こんなものか」

契約書のようなものにさらさらと羽根ペンで書き付けていく。ゼロ、ゼロ、ゼロ……。

順番に紙を埋めていく文字に、僕は驚いて身を引いた。うそ、こんな金額、高級な宿屋に一年泊まっても使い切れないんじゃないの！ 固まっている僕の前で、アルフレドさんは最後の一文字を書いた。そして何でもない顔をして僕の手押し付けようとするから、慌ててぶんぶんと手を振る。

「こんな額、頂けません！ 本当に、通りがかったのはたまたまなんです！ それもアントリオンがほとんど制圧していて、僕らがやったことなんてちょっと小突いて縛ったくらいの話です！」

「縛られていた私を治療してくださいましたのもこの方ですよ、お父様」

「怪我をさせられていたのか！ ぐぬう、許せん！ それならますます金額を……」

「ちよい待ち、旦那」

ゼニスが背後から手を伸ばし、ひょいと紙を取り上げた。従者の人にペンを要求し、貰ったペンの先を端からスーッと滑らせていく。数字の半分以上を消したところでペンを止

め、うん、と大きく頷いた。

「俺たち、まだここじやランクの高くはない傭兵でな。俺たちが受けられる仕事の最大額はこんなもんだ。身に合わない仕事はしないようにしてるが、旦那が俺たちを評価してくれるんなら、これくらいだったら貰うよ」

「こ、これっぽっちで良いのか。なんと欲のない……」

いえいえ、僕らの泊まる宿のひとつ上のランクで、二ヶ月は飲み食い出来る額です。ちよっと盛ったなゼニス。ちらりと横顔を見ると、黙ってろ、と目で囁かれた。こういう交渉事はあんまり上手くない自覚があるので、空気に吞まれぬゼニスに任せることにする。

それにだ、と続けて、ゼニスはひらりと手を振った。

「あぶく銭は色々危ないもんも連れてくるからな。どっちかって言うると継続した仕事のが助かる。例えば、そうだな。旦那の商隊の護衛の仕事を優先して回してくれるとかだとありがたいな」

「ふむ、なるほど。儂としても強さの担保された傭兵の存在は重宝する。優先して仕事を回そう。名前は？」

「俺がゼニス、こっちがレイニーだ。あっちの通りにある宿屋で世話になってる。しばらくはこの街に留まるつもりだ」

交渉成立。あんなに多額の謝礼は受け取れないし、安全に保管しておく場所もない。金

払いのいい依頼人の確保は、今後の生活に大いに潤いをもたらすだろう。

「あの、レイニーさん、ゼニスさん」

アシュリーさんが僕らの前に立つ。ぺこり、と大きく頭を下げた。

「本当にありがとうございます。こんな機会でしたが……私、あなた達に会えて良かったと思っ
ています」

僕とゼニスは顔を見合わせた。そして笑顔を作る。

「巡り合わせは天の導き。僕もきみとお話出来てよかった」

「いつでもこいつは貸し出すから、遠慮なく依頼出してくれ」

「貸し出すって、僕はモノじゃないんだから、もう」

「ふふふ……。でも、また会えたら嬉しいですよ。お話、もっとなんかして」

控えめに彼女が首を傾げた。危険な犯罪によって得たものだとはいえ、知ることのできなかつた母の故郷の話は、彼女にとっていい恵みだったのだろう。

謝礼金は驚くほどすぐに用意された。ずしりと重たい革袋を貰い、僕らは彼らに別れを告げ、元々の目的であつた魔物の掃討報告に向かうことにした。

その道すがら、ゼニスはにやにやとしながら僕を小突いた。

「可愛かつたな、アシュリーちゃん」

「うん、美人だと思うよ。血が繋がっていなくても、お父さんが溺愛しちゃうのがわかる

気がするな」

「ありやあお前に気があるぜ」

僕は驚いて立ち止まった。そしてふくれ面になる。少し先で振り返ったゼニスをとりと睨んだ。明け方の街には、少しずつ人の往来が増え始めていた。

「誰だって、命の恩人には好意を持つものだと思うよ。そんな、何でもかんでも色恋と結び付けるのははしたないと言うか」

「クソ真面目だよなあ、お前」

呆れ顔のきみの隣に近付き、僕も彼の脇腹を小突いた。大きさに飛び退くきみを置いていくように、足早に冒険者ギルドへの道を行く。

クソ真面目もなにも。可愛い女の子の鼻の下を伸ばしているきみも、僕に気があるとにやにやするきみも、見たくない。だって、僕はきみのことが好きなんだから。……好きだと面と向かって言えることは本当に少なくて、きみはもしかして僕の好意を忘れちゃってるのか、とまで思える始末だった。

アシユリーさんは女の子らしくて、可愛くて、誰だって好意的に思うようなお嬢さんだ。でも、そこまでの話。

もしかして。懸念を振り払うように首を横に振る。

きみは、僕の気持ちを知って、それでも一緒に居てくれると決めたけれど。……本当は。

本当は、僕がさっさとちゃんとした女の子と番うことを望んでいるんじゃないか、とか。ぐるりと渦巻いた思考が手を伸ばし、心に影を落としそうになる。

「まー、胸はもうちよいあつた方が良いとは思うけど」

「アルフレドさんに聞かれたら刺客放たれるよ」

呑気なものだ。まったくもって腹立たしい。肩を怒らせる僕に、けらけらと笑うきみの声が響いていた。

「よお坊主。早速依頼が入ったらしいな？」

「まじ？ やりい！」

「お前じゃない、そっちだ」

「僕？」

朝起きて階下に降りるなり、宿屋の主人に声を掛けられる。冒険者ギルドと提携している宿屋のため、掲示板には新たな依頼が入る度に依頼書が張り出され、朝から見繕う冒険

者達がよく見られた。少し背を伸ばして今日も賑わう一角を覗こうとすると、ちよいちよいとゼニスに肩をつつかれて、反対側を指差される。

「あの旦那の話なら、俺たちに直接、だろ？」

「そうだ。『ヴィエラのレイニー』をご指名でな」

ぴらりとカウンターの下から一枚の依頼書を取り出し、主人が見せてくる。ふたりで覗き込むと、確かにそこには僕の名前があった。僕の名前、だけ。

「あれ、ゼニスは？」

「指定は一人だな」

「なるほどねえ。よし、行つて来い。俺は別の仕事しとくからさ」

「え？ う、うん。良いけど……良いのかなあ」

「良いのかなあ、つて何が」

「だってこれ、護衛の仕事でしょう？ 護衛なら尚更、僕よりきみのほうが向いているのに」

依頼書には、日時、場所、仕事内容の指示書きがある。日時は三日後の昼から夜にかけて、場所はラバナスタ商業区、内容は依頼人であるアシユリーさんの護衛だ。金額は街中の護衛にしては高過ぎるくらいだが、冒険者ギルドを通したものだからか、この間提示された額よりは常識的だった。

商業区を出歩くのに、護衛を付ける。それはもちろん、また攫われるのを心配する親からすれば当然のことだろう。ならば尚更、一人を指定するなら近接に秀でたゼニス指定するべきだし、むしろ一人に絞る理由もないのではないかと思う。僕らは二人で真価を發揮する。二人分の金額を出すのだって、彼らにとってははした金だと思えた。

はあ、とふたつ分のため息が聞こえた。僕は驚いて顔を上げ、左右の顔を見遣る。ヒューランの主人、ゼニスはともに何事か目配せをし、やれやれと首を振っている。

「何か間違ってる？」

「お前さあ」

「幼馴染みだろ、なんとかしてやれ」

「これ俺が悪いのかな。……いや、お前が悪いな。これは俺関係ねえもん」

「何がさ！」

腕組みをしたゼニスは、思いつき呆れた顔で、依頼人の名前を指した。アシユリー・アップルヤード。依頼者がきちんと仕事を確認した証として、流麗な字でサインがなされている。

「アシユリーさん？」

「単純に武力の要る依頼なら、依頼人は『アルフレド・アップルヤード』になるだろうさ。娘のためを思う父親の采配なら、そりゃ俺も呼ばれるだろう。でも、依頼者はあのお嬢さ

んの方だ」

「……うん」

「彼女が、お前を指名したんだ。存分に街歩きさせてやれよ？」

そうか、彼女とは少し話をした。まさに深窓の令嬢といった趣の彼女であつたが、少し外に出てみたくなつたのだろう。そんな時、伴う相手として外を知る同族を縁にしたかつたのかな。もし同伴するのが彼女の家の護衛たちなら、そう自由にさせてもらえないかも知れないから。

少し嬉しくなつた。彼女の外を知りたいという望みが、潰されずに済んだことに。あのお父さんの溺愛っぷりなら、一度攫われた彼女からどんどん危険を遠ざけようとしてもおかしくはない。

「奇しくも今日は休日だ。よし、街に行こう」

「いいよ。何を見るの？」

「お前の服だよ」

「僕の？ 最近街に着いて新調したばかりじゃない」

「お前、ご令嬢の隣歩くんだからもうちょい良い格好つてのがあるだろう」

それもそうか、と僕は頷いた。政治を執り行う、貴族たちの住む王宮に近い区画と、僕らみたいな旅人が滞在する下町のエリアでは、街を行く人々の服装にも格差がある。この

間彼女を助けた時なんか、武装していたし獣の返り血を浴びていたしで、彼女からしたら相当な格好をしていたのかも知れない。少し悪いことをしたかなあ、と思う。

服を見ると、大抵気にするのは機能性だ。動きやすいか、洗いやすいか、気温に対して調整しやすいか。デザインや格式についてはあまり考えたことがない。

「どんなのが良いかな」

「流行りの服に一番詳しいのは服屋だろう？ 何も考えずに店員捕まえて一式揃えて貰おうぜ。デートに着てくっっておきを頼むわ、ってな！」

「デートじゃなくて護衛依頼」

「はいはい」

中略

何はともあれ、お仕事は終わった。僕が居ない間、彼はどうしていただろう。二人の間できみのことを考えていたなんて、きみは知る由もない。きみのことだから、他の傭兵たちと混じっても浮きはしないし、随分上手く仕事をこなしているんじゃないだろうか。

宿屋に帰ると、既に彼は仕事を終えてベッドで寛いでいた。僕に気づくと、彼は軽く片手を挙げて応えた。

「おかえり」

「ただいま。……慣れないことしたから、ちょっと疲れちゃった」

着ている服がまず違和感だ。確かに質は良いのだけれど、やっぱり普段の戦闘用のジャケットを着込んでいる方が身体がずっと楽だ。シャツやベストに縫い付けられた、たくさんの釦を指で一つ一つ外す。おしゃれと機能性の両立は難しいと、一日着ていると強く思う。さっさと値段が四分の一以下の服を身に着ける僕を、ゼニスがけらけらと笑った。

「似合ってたぜ？ 彼女とも釣り合ってたしな。慣れてないとはいえ、あんだけいい雰囲気

気出してくれたら彼女も喜ぶってもんだろ」

まるで見ていたかのような物言いに、僕は片眉を上げた。いい雰囲気って、どういうこと？ 訝しがる僕を見て、ゼニスは悪びれる様子もなく、自らの寝台の脇に置いてある、片刃のナイフを指先でつづいた。

「今日の俺は護衛の護衛だよ。依頼人はアルフレド・アップルヤードだ」

僕は軽く目を見開いた。それって、つまり。僕はわざと音を立ててベッドに腰を下ろした。認めたくないが、僕が一度たりともナイフを抜かずに済んだのは、幸運でもなんでもなく、仕組まれていたことだったのだ。女性ひとりに観劇をさせるのにそこまでするか。僕は少しお金持ちの考えに呆れてしまった。彼女が可愛いからと言って、全くもって過保護だ。据わった目で片膝を立てる。

「心配すんなよ、俺も何もすることなかったしな。でも、これで分かっただろ？ お前も。これは護衛でも何でもない、ただのデートだったってさ」

ゼニスはひらひらと手を振った。

確かに。確かに、そうだったのかもしれない。彼女は恋に憧れていて、彼女を助けた僕と、一般市民のするような共歩きを試みたいと願ったのかもしれない。全部を邪推にするには、お膳立てされ過ぎていた。全部知って、彼は僕を送り出したのだろう。

それじゃあ。僕は不機嫌になって、唇を軽く尖らせた。きみはやっぱり、そう思ってい

る上で、僕を差し出した。その意味することを考えたら、機嫌も損ねると言うものだ。彼を睨む。

「どうして」

「なに？」

「どうしてそんなに、きみは楽しそうなの」

ゼニスはごろりと寝返りを打ち、腹筋だけで起き上がった。寝台の上であぐらを掻いて、心底不思議そうにした後、ふは、と笑って見せる。

「そりゃ、俺の相棒が玉の輿に乗ってくれるんだからいい話でしかないだろ」

「乗らないよ、玉の輿なんか」

「良いじゃん、何が不満なんだよ。金持ちであること抜きにしても、彼女、すごいいい子だろ？ 年も近いし、むしろ俺たちより少し下だけ」

「ねえ、それってさあ」

爪を立てると、自分たちで掛けた洗いたてのシーツに皺が寄る。努めて静かな声で、彼に質問を投げかける。

「きみは、僕に彼女と一緒にあってほしいの」

頑張っても、声は震えた。ゼニスは不思議そうに首を傾げる。どうして僕がそんな声になっっているか、まるで何も分からないみたいなの振りをする。どうして。

ゼニスは少し宙を見て考えた。でも、悪いと思う顔じゃない。どうすれば僕が納得するのか、説明を探すような、そんな顔だ。

そして結局、上手く言いくるめる言葉は見付からなかったようで、肩を竦めた。彼が口を開く。

「単刀直入に言えば、番ってやってほしいと思ってる」

でも、と彼は何かを続けようとしたが、僕が許さなかった。

僕は手を伸ばして、彼の口を塞いだ。彼の寝台に飛び乗り、彼の肩を無理矢理に押す。どさり、寝台に倒れ込んだ彼は僕を見上げて驚いた顔をしていた。

じりじりと腹の奥が灼けるような感覚を覚えた。どす黒い怒りだ。どうして。どうしてきみはそんなことを言える。知らないのか。ずっと僕の視線を知らんぷり出来る、その肝の据わり様と言ったら。ああもう、この醜い渦をこうなるまで育てたのは、きみに違いない。

知らないとはもう言わせない。僕は低い声で唸った。

「ねえ、僕はきみのことが好きなんだよ。どういう意味か、わかる？ きみが何度も何度も無邪気に僕を切り付けて。いつまでも大人しくしているとでも思っていたら大間違いだよ」

僕の下で、彼は瞳を動かさなかった。驚けばいいのに。怯えればいいのに。けれど彼は、

不思議そうに片眼を細めた。まるで何を今更な、とでも言っているように見えるその表情に、一瞬だけ僕は竦んだが、気取られないように彼の肩を掴み直した。

「きみが好きだ。きみと番いたいと思っっている。きみを犯してしまいたいと思っっている。

……嫌ならそうと言えばいいじゃないか。遠回しに否定して。きみらしくない。言えよ」
手を外して、肩を押さえつけて。がぶりと肩口に噛み付く。びく、と危機に勝手に反応した彼の身体が跳ねる。けれど、自由にしたというのに、彼は無言だった。何も言うべきことがないのだろうか。小さく漏れる詰めた吐息が、大気を震わせた。

手のひらを滑らせて、シャツの裾から侵入させる。形良く付いた筋肉の凹凸を確かめるように撫でると、感じ入ったように力が籠もる。僕を突き飛ばしでもすればいいのに、彼の手はシーツを掴んでいる。

脚の間に膝を突き、興奮した昂ぶりを彼に押し付ける。嫌なんだから、抵抗しろよ。ゆるく前後させる腰の動きにも、彼は何も言わなかった。腹立たしくなって、至近距離から彼を鋭い視線で穿つ。

「ゼニス、きみは」

「強い男が種を蒔くのは、義務だろ？」

不思議そうな顔をしないで。彼の言葉も、表情も、怒りを増長させる作用しかない。確かに森ではそうだった。残すのを許されるのは強い雄だけで、それはある種の義務だ

った。けれど今は違う。彼を連れ出したと思ったのに、まだ心はあの森の中に居るのか。唇が震えた。ああ、おかしくなりそうだ。

きみが僕を何とも思っていないことはよく分かった。それでも爪痕を残そうと彼のベルトのバックルに手をかける。だきどきみは抵抗しない。本気できみに暴れられたら、お互いにただでは済まない筈だ。なのいきみは。……まるで、何も感じないように。

義務なんかじゃない。僕は感情を以てこれを為そうとしている。それが、本気で分からないのか。瞼の裏がちかちかと光るような感覚があつた。低く息を吐く。

彼の開きっぱなしの唇に噛み付いた。彼の手は僕の胸を押さず、ゆるく僕の肩を掴んでいた。何がなんだか分からない。

「怖くないのか」

「どうして？」

本気で言っているように見えた。しても嫌がらない、抵抗しない。しかし僕をよそと番寄せたがる。何を考えているのかさっぱりだ。吐息が触れ合う距離で、ゼニスはその赤い目を細めて笑った。

「だって、お前じゃん」

がつん、と頭部を鈍器で殴られたような衝撃だった。彼は、それに、と微笑みながら続けた。

「身体の繋がりどうこうに、お前が思うほど深い意味はないだろ。お前がしたいならすれ
ばいいし、俺が認めたお前が求められるなら、俺も嬉しい」

僕だから。僕はきみにとって、何だ。

大切に思ってくれていると勝手に思い込んでいた。僕の想いに言葉は返ってこないが、
そこに拒否や否定はなかったから。でも、これじゃまるで無関心じゃないか。僕はなんの
危機感ももたらさない安心安全の生き物。彼にとって僕の感情をあしらうのなんて指先ひ
とつで出来てしまう技に違いなかった。小動物をあやすようなもの。噛み付かれても、怖
くない。

どこまでもきみは、純粹なヴィエラの男なのだった。感情もなく子をもうける。子の出
来ることのない、この行為の意味を知らないきみが憎くて堪らなかつた。名実ともにきみ
を手に入れたい、この感情に気付かないでいられる鈍感さが憎たらしかつた。僕はゆっく
りと腕を伸ばした。シーツに散った髪を揺らして、きみが不思議そうに離れていく僕の顔
を見上げる。

「レイニー？」

緩慢な動きで、僕は彼の上から退いた。ベッドに放っていた靴を取り、腰に巻きつける。
少し他所に泊まるだけの資金は入っていた筈だ。立て掛けていた愛用の杖を担ぎ、ブーツ
の音を立てて部屋のドアに向かい、手を掛ける。

「どこ行くんだ」

僕は答えた。

「きみの居ないところに」

「……おい！」

声が飛んできたが、構わずに扉をくぐって閉め、さっさと階下に降りる。宿屋の主人に一人だけ拠点を他所に移す、と告げて街に出た。夜の街は悲しいほど無神経に賑わっている。酒の匂いのする通行人が派手に騒ぎながら歩いていった。

拳を握り込む。冷静じゃない。でも、……分かっていたことだろう、と静かに告げる自分がいる。

好きだと初めて告げてから、年単位で時は過ぎていく。その間、起こせる行動はいくらでもあった筈だ。けれど僕は逃げ続けた。心地よい距離感に浸かっていた。彼を問い詰めることもなく、ただ隣に在ればいいとだけ願った。こうもなる。

ギルド提携の宿屋は一つじゃない。個人向けの小さな部屋しかない所があった筈。頭の中で地図を展開し、人混みに紛れて酒場の並ぶ一角を歩く。すぐに見付かった慎ましやかな佇まいのドアを開けて、中に居るいかめしい顔をした男に部屋は空いているかと訊ねる。じろりと頭のとっぺんから爪先まで僕を観察した男は、ルームキーをカウンターに載せた。鍵を手に入れて、細長い建物の階段をいくつつか上がる。書いてある番号の扉を見付け、

鍵を回すと、薄暗い部屋が待ち構えていた。窓は開いていて、見た目ほど淀んだ空気はそこにはない。ランプの灯りも付けないまま、僕は部屋に立ち入って窓辺に近付いた。

小さな縦長の窓の外には、街灯に照らされた夜の街が映る。僕は窓枠に手を掛けたまま、背を丸めた。軽く鼻を吸る。

じわじわと涙が溢れてきた。こんな風に終わるとは思っていなかった。ぱた、と木の枠に雫が落ちて丸いシミを作る。ここまで引きずってきた結果だ。もっと早く気付けば良かった。

もつと。……それこそ、彼を無理に森から引き離すこともなく。拗らせた恋を押し付けることなく、終わらせていれば良かった。彼の生きたい場所と僕のそれは、乖離があったのかも知れない。どうして気付かなかったんだろう。

思い返せば、彼のくれた色んな表情が蘇ってくる。笑った顔、怒った顔、真剣な横顔。

……困り顔は大抵僕だったな。くるくると表情を変えるきみを追うのが昔から好きだった。手を伸ばして、窓を閉めると、外の音が小さくなる。鍵を掛け、よろよろと力なく歩いて、ぼすりと寝台に身体を投げる。主人はやる気がなさそうなのに、寝台は深く沈み、柔らかく僕を受け止めた。

好き。嫌いにはなれない。大切な僕のきみ。でも、先には進めない。だから、ひとりで抱えていれば、それでいい。胸元で両手を握り込む。きみがどんなに無関心でも、僕だけ

はこの心を大切にできる。嗚咽が漏れる。悲しくて、苦しくて。

好きだよ、大好き。ぼろぼろと涙を溢しながら僕は目を瞑った。真つ暗な中でひとりぼっち。でも、これ以上自分を傷付けて彼の側に居ることは出来なかった。

好きになってほしかった。心と心を結びたかった。どんどん欲深くなっていて、我慢が利かなくなる。出来ることの増えてしまった大人の悪いところだ。

どろりと眠りに溶けていく。